

## 第二期 傘地時代

明治四年由利公正歐洲の絹物數種を齎して蚕業家酒井功に之を示し且告ぐるに歐洲絹業の進歩を以てす其後明治八年に至り舊敦賀縣に於て酒井功等の請願を納れ橋本多仲細井ジュンの兩名を縣費生として京都奮織殿に派遣して佛國バツタン機の技術を學ばしむ翌九年敦賀縣の廢せられて石川縣に合併せられたる際縣費生を廢したる爲め橋本細井の兩名半途にて歸國せり依て直に酒井功は石川縣にバツタン機購入貸與の事を請願して機具二臺を借用せり而して十年一月に至り毛矢町の南端たる石川縣勸業分場に右バツタン機二臺を据付け橋本細井の二名をして之が使用法を傳習せしむ其年三月福井東本願寺別院内に開きたる勸業博覽會場へ該機械を出し橋本細井の二名並に當時奉書紬の製織に従事したる綠川祐之進等をして機具運轉を試せしめ以て公衆の縦覽に供せり是傘地時代の起源にして以後漸く斯業に従事するものを見るに至れり

同年春酒井功、村野近良等は富田四方介長谷部弘連の二人に機業會社設立の發起人たらんことを勧む爰に於て兩人より有志者岩上岩三郎、水野彦人、川崎金次郎、岩村繁介、富田循良、伊東祐直、村野文次郎、梶川徹介、久我確、綠川祐之進、及先きの四名と協議し都合十四名む以て株金若干を出し織工會社を組織し同年四月福井毛矢町通りに一の織工場を設け機具十臺を備ふ村野近良之が社長となり綠川祐之進之が支配人となり細井ジュンを織工教師とす是を福井に於ける機業會社の嚆矢となす當時會社の製品は綾織ハンカチーフ蝙蝠傘地の二種を試織せると雖も職工の未熟なると機具の完全ならざるとにより精良の品を製すを能わず又機具の不足品あるも破損の箇所あるも之を修繕するの職人なく非常の困難を感じたり十二年夏工場を毛矢町に新築し事業を擴張せんとす適々社論二派に岐れ一は事業の不利なるを諭して會社の解散を主張し一は將來の進歩を豫期して事業の擴張を論じ其結果遂に酒井村野綠川等の七名退社し岩上岩三郎其他七名は會社に留まり各自其祿券家財を挙て會社の資本に供し進んで新築工場に移り更に織機を増て二拾臺とし長谷部弘連を社長に富田循良を幹事に推し一致協力以て業務の擴張を謀り力を製品の改良に致せり然れども其間資金を投ぜること約壹万貳百餘圓に及び爲に製織事業の前途の多望を認むると雖も資力漸く盡き大いに維持の困難を感じ十三年三月先に織工會社を退きたる綠川祐之進等機具拾臺を調べ舊御泉水町に一の機業場を設け翌十四年葛巻包喬も亦機具拾臺を新調して江戸町に開業し其後戸枝フサ福島茂吉等亦開業す爰に於て競争大に機業者間に起こり前後相躓いて閉業する者多く會社として依然たる者は唯ち織工會社ありしのみ十六年十一月織工會社は石黒福井縣知事に向つて會社維持の爲に士族授産金貸下を請願す十七年春織工會社はメカニク器械を以て紋織ハンカチーフ及洋服裏地等を織始む當時各製造家の用ひたる染色法は明治十一年二月東京府勸業課の

著に係る西洋染色法より葛巻包喬の獨修したるものを傳習したりと云ふ此時又葛巻包喬は當時の器械工長谷川與に謀り絲繰車（現時のカラミ車）を改良せり十七年三月京都野田友藏の注文に係る尺一寸幅奉書ハンケチを製織せり翌十八年ボタンを以て尺三寸ハンカチを製織し船越和介の手を経て印度に輸出す是我縣製絹が外國直輸の嚆矢とす然るに不幸にして其後印度に虎列刺病の流行したる爲め一時輸出を中止せられたるを以て東京小舟町米倉嘉平に販賣を依頼したり十八年四月横濱相生町鈴木大吉の手を経て居留地貳百五拾七番メソデルソン商會に尺五寸、尺八寸、六丈物ハンカチーフ数百疋を賣込みたりと云ふ

十八年夏農商務省技師荒川新一郎來縣し本市全機業家を風月樓の別邸に徵集し從來製出する処の織物疎製濫造に流るゝのみならず短尺疵及表打等の不正を矯正せんことを諭す是に於て葛巻包喬富田知剛等同志相誌る橋南には竹内唯七勝見地方は眞樂寺橋北は竹谷彦平松本地方は清圓寺等に便宜各地方の機業家を徵集し矯正の策を講ず八月織工會社長長谷部弘連没したるを以て少しく從來の組織を改め富田循良を取締約となし岩材繁介を濫査役とし内田衡を顧問とす其年十二月先に織工會社の請願したる授産金貸下の件を採納し石黒縣知事は長谷部弘連外九名に封し金四千圓を貸下たるを以て會社の事業少しく振ふを得たり是より先本多鼎介外十九名も株式組織を以て起業社稱する一機業會社を設け機臺式捨餘臺を備へて開業す

近日、すでに公開済みの下記資料と統合し、さらに一部図表を追加し「河田貫三『福井縣物産誌・絹織物』」として1本化する予定です。

第三期 羽二重創始時代

第四期 羽二重終成時代

取引組織の沿革

練白業の沿革

機具の沿革

附属器の沿革